

遺流 小纂

新撰小學諸禮式

在田嘉九郎編輯

全

特35

607



012079-000-1

特35-607

新撰小学諸礼式

在田 嘉九郎/編

M15

AAG-0137



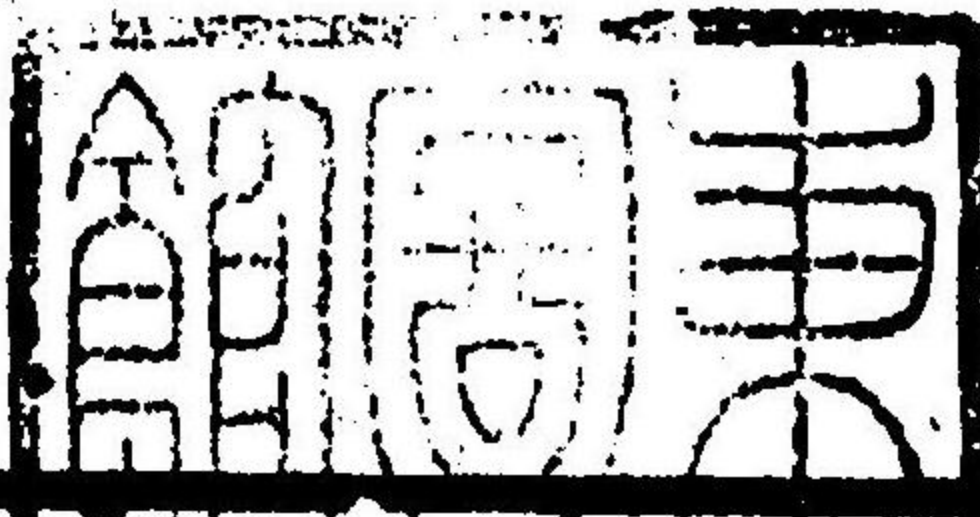
小笠原遺流  
在田嘉九郎編輯

# 新撰小學諸禮式

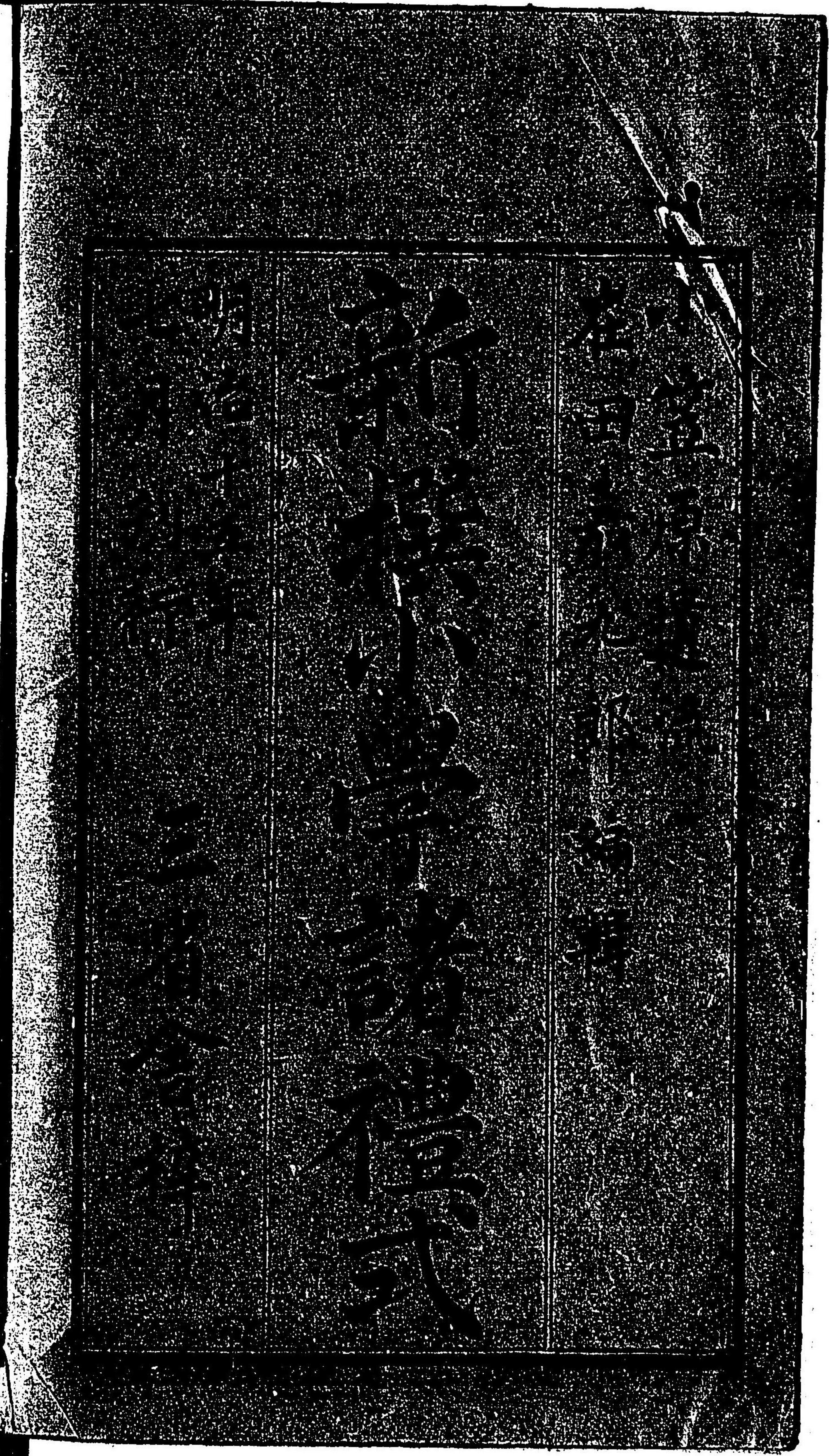
明治十五年  
七月刊行

三省舎梓

進退周旋禮に適ふハ人の美事あり而して禮ハ  
仁乃文素より内より存び豈敢て一定の式を鍍を  
糸を要劣人や然きども智育徳教自ら種別あり  
や云ふなごうご智者亦必徳あり徳あり者亦必  
禮を知は尋常の人焉ぞ能く然るを得人や古より  
其動作を教へ起居を戒免恂々焉止まざる  
の者一これに依るる今や文化月に普く  
智識日に進むの時ふ際し禮儀作法の式ハ地を  
掃ふに到はあとの状景あり見ふ豈嘆むべき  
にちもばや然り而亦同憾の人あるべし後進



進退周旋禮に適ふハ人の美事あり而して禮ハ  
 仁乃文素より内より存び豈敢て一定の式を鍍を  
 系を要劣人や然まども智育徳教自ら種別あり  
 々云ふだうらむ智者亦必徳あり徳あり者亦必  
 禮を知は尋常の人焉ぞ能く然るを得人や古より  
 其動作を教へ起居を戒免恂々焉止まざる  
 の者一に此に依るる今や文化月に普く  
 智識目に進むの時ふ際一禮儀作法の式ハ地を  
 到はあとの状景あり見らる豈嘆むべき  
 ばや然り而亦同憾の人あるべし後進



の徳志ある者へ就きて聞くを得べきか獨り憾  
む世間其事な教ふるの良書に乏しく未だ我黨  
の望を足り能はざる故に予の謫劣を顧みば  
小笠原の遺流を序で又當時一定の式とある者  
者を選択し併せ録して一卷とありて世に公し  
る固より又良書と云ふにたゞ適まて世の  
識者を促し完全の良書を編成公行せしむるに  
足るは幸甚

明治十五年七月

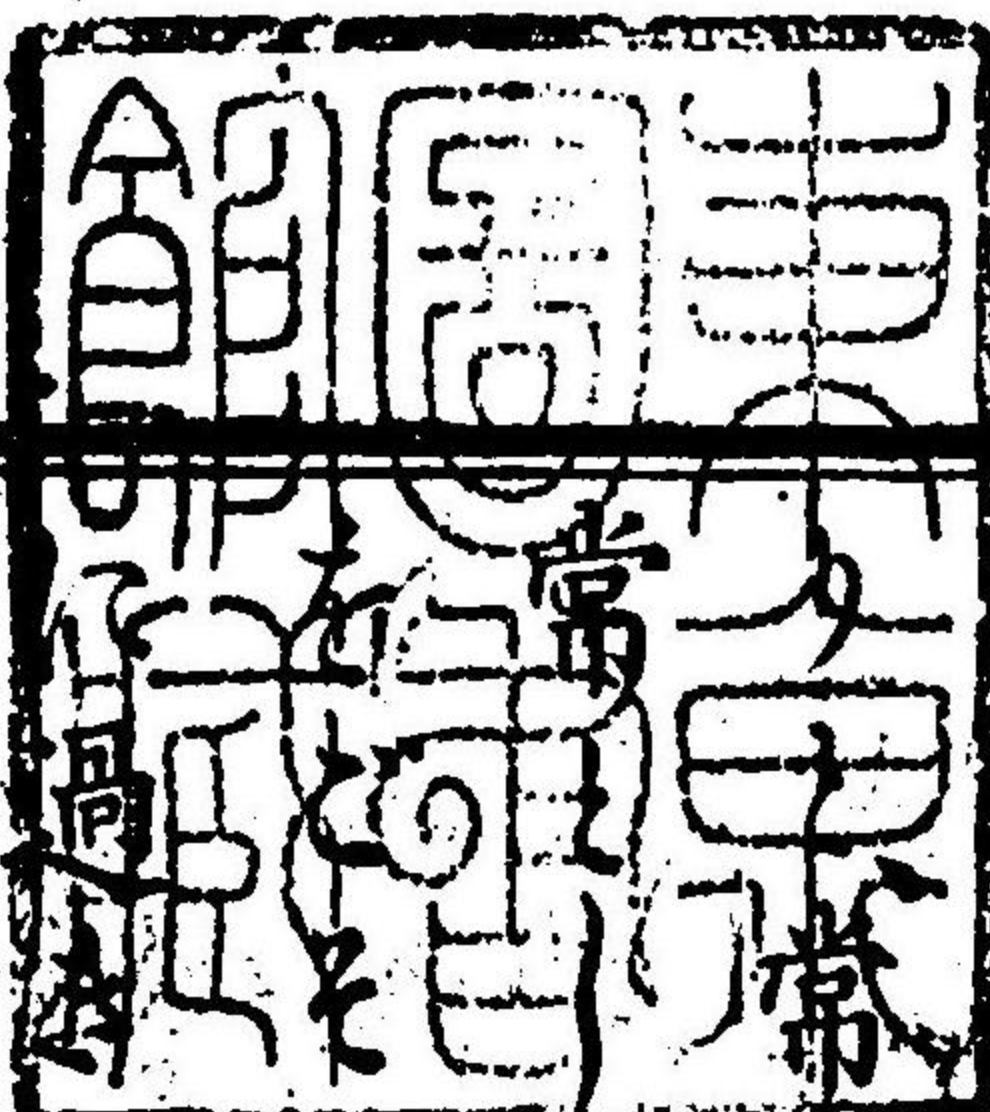
編者 識

新撰小學諸禮式

在田嘉九郎 編輯

禮の事

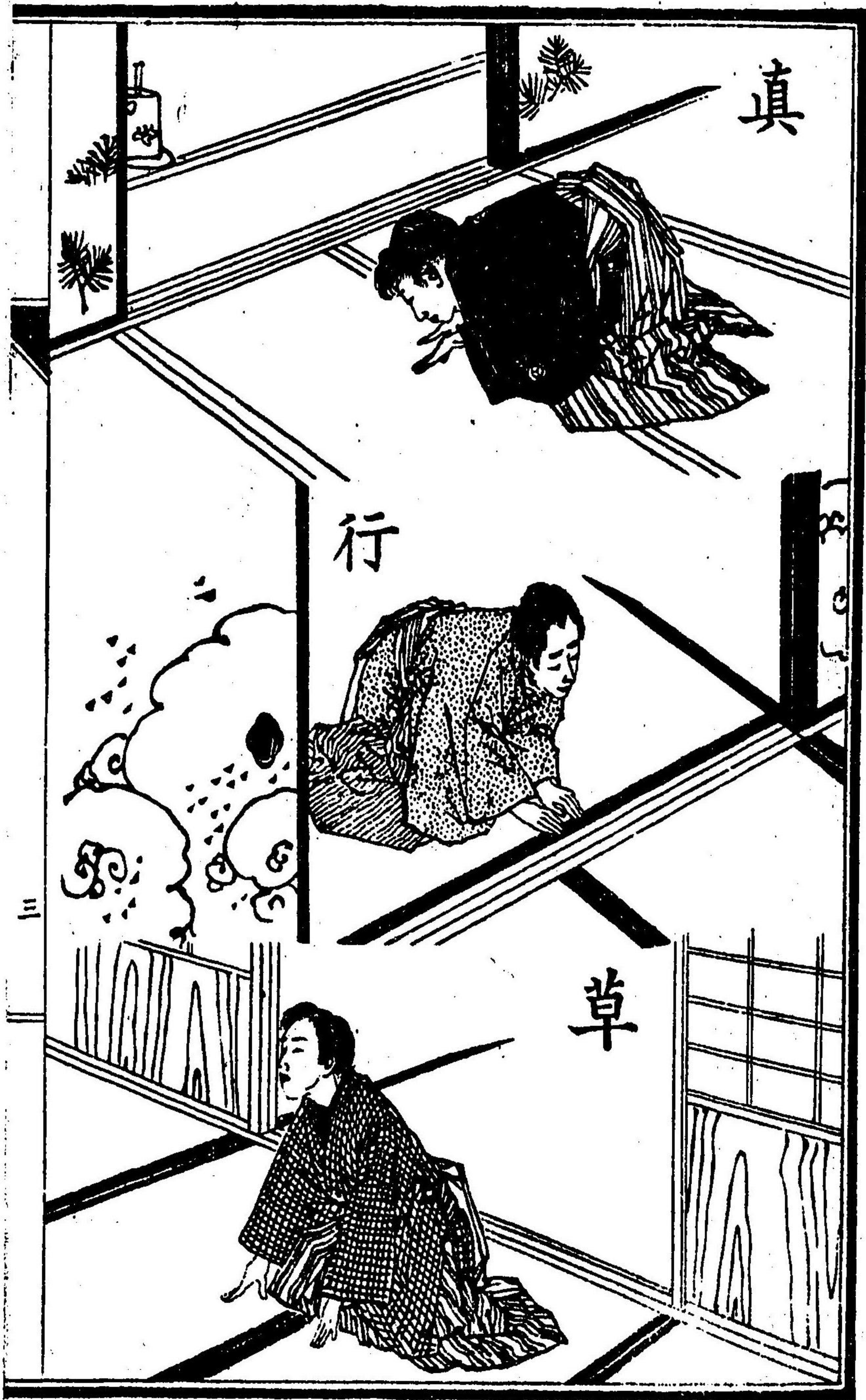
禮ハ内に敬ひ慎む心ありて之を容体ハ形ハ  
まことのふれバ如何おもひみく慎み苟りにも  
野鄙粗忽のともありてハ其節たふおたらぬものな  
るに心得べき事なり去るふがら世の人の  
て儀式作法の場ハ身を置く時ハ何事も  
らあるを貴み容体顔色共ふ何となく嚴  
てものまごき程に立至る事あり如斯も



亦節に當りたる者といひ、云ひ難し、何となれば、和らぎざれば、禮不あらざれば、故に、慎みて、獨り居る時と同じく、儀式の場不在を改めて、物事を嚴重にまゝやうの事あるべからば、殊更長上に接する時、顔色を和らげ、心を穩み持こと、肝要あり、又愁傷の場處杯にありて、自分の心、小愁傷して、其様の自然容体、形あり、を、誠の禮といひ申にあり、斯くの次第、故心もなき事哉、容体にのみ、は、くりこし、動もまれば、爲まると、思ふ事ハ、表裏とあるハ、誠し、忌むべき事なれ

む、自ら省みて、其身を、慎み敬ふべき事にぞある  
歩行やうの事

座敷を歩行するに、ハ、兩手を膝の邊に垂れ、身体を直くして、右の足より進み出し、早かゝり遅からむ、跟を疊に付けて、静に行歩まべし、椽側或ハ、板の間等を歩行する時、殊更慎みて、足音の響かぬやう、注意まべし、指をたらし、手を動かさハ、無禮あり、且歩行の間、決して物を踏み越さべし、草履等の如きも、人の物を踏越さハ、甚だ無作法ある事あり、故に、通り道に物ある時、跪きて、



側へ取のけ通るべし、目遣ひハ賤しからぬやう  
心懸け頻りに眼を左右へ轉トのぞき見ト目  
ばかひ等ハ、をまどき事ぞが

座王やうの事

兩足を揃へて立ち止まり、左の足より、一足づ、  
後の方へ引き爪先を立ておろし、兩膝をつき、兩  
足の拇指を重ねて坐れべし、坐せる時直に其手  
を膝上お置き、腋のあたりには雞卵一個ばし、を狭  
みて落さぬやうある心得、腕を据へる

座禮の事

拜禮ふハ、真行草として、高貴の人、及同輩下輩の人に對して、おをべき様あり、其高貴の人、お對して拜さるハ、真の禮にして、拇指と、及食指中指とを突き合せ、膝の上より、徐らに疊の上に下し、兩の臂を其膝の前おつき、額を手につく迄で垂ふべし、頭を揚げんと欲さる時ハ、其揚くるに隨ひて、手を開くべし

同輩の人、お拜さるハ、行の禮かり、先其兩手を並べてつき、臂をば膝の前、お下げ、頭を垂れて、手は離る、一二寸の邊お至るべし

草の禮もて下輩に對し行ふにハ、兩手を膝の前につき、其間を四寸許り開きて、終に頭を垂るべし  
凡て、真行の禮を行ふに、頭のみ垂きて、肩を下げざれば、首筋あきて、甚だ見苦敷ものなり、故に腰肩頭の一様に平あるやう、肩と頭とを下るを良とん

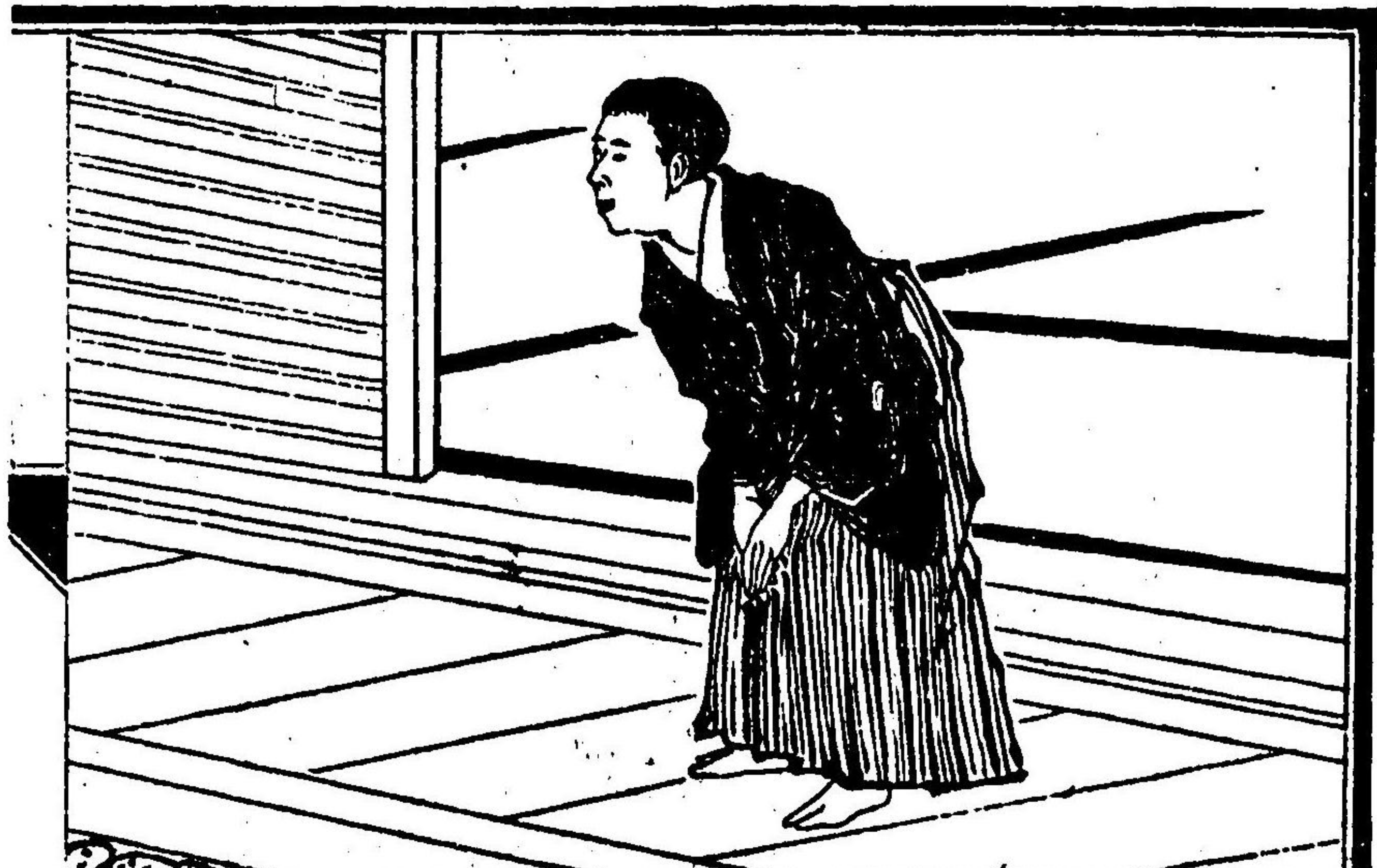
### 座を立退く時の事

着坐のまゝ、少く腰を上げ、兩足の指を爪立て、再び腰を跟の上お置き、兩手を膝の上に居へ、下

坐の片膝を上げて、少少し開き残さる膝を添へて、下  
坐の方へ廻り、下坐の足より立ちて、又其足より  
進み出さるべし

### 立禮の事

兩足を揃へて立ち、兩手或膝頭に垂れて、伏さべ  
し、若し帽子を頂ける時ハ、當初右の手にて其帽  
を脱し、左手に持直して、右の如くさべし、椅子に  
在る時ハ、兩手を垂れて、股の上に置き、椅子を離  
きて立ち、手を膝頭に垂れて、俯伏すべし、又禮服  
を着たる時、最敬禮を行ふにハ、右手ふて帽を



脱し、左の腋に狭み、左手もて  
之を抱き、右手ハ膝頭に垂  
れ、腰と一様に、体を前に伏さ  
べし

### 途中を連立立ち又ハ立 別る時の事

路上を往來する時、他人と連  
立ち、若其人高貴あるハ、或ハ  
我父母と同輩ある時ハ、必  
其後へはきて行くべし、我兄



と同輩をるとき時ハ、左右の邊の後へに立ち、同輩ある時ハ、相並びて行くへ、若し用事ありて、他の路に進まんと欲する時ハ、一禮して別るべし、其同輩と肩を並べて、歩行せる時ハ、前より其方位を考へ、其人の後を、右或ハ左へ避けて、用意を以て、別る時ハ、先に覺られ、朋輩をして、自己の後ろを、避けしむるやうの事あるハ、不注意と云ふべし

途上にて、高貴の人に出遇ひ、或ハ兼て見知れる長上と往き違ふ時ハ、一禮して、其人の左方に避

くべし、同等人と往違ふ時ハ、右に避けて進むべし、若し貴人老人等の、何とに行けるやあど、尋ね問はる事あらば、丁寧な答ふべし、自己より之れを問ふハ、甚だ無禮ありと心得べし

### 夜行する時心得の事

小路を廻り、潜門を出入りする杯の時ハ、先きに左の足を踏み出し、程能く左右を見合せて、終ふ右の足を進め、尋常の通り歩行をべし、若し高貴の人、或ハ老人杯を伴ひたる時ハ、已れ先きに進みて、萬事に氣を付け、殊も木陰杯ハ、別て路次の

模様、氣を配るべし

障子襖出入の事

障子を開き、襖を出入するにハ、下座の方へ廻り、足を爪立てし、坐し、左の手をつき、右の手にて開き、次きの間ふまりこし、て、志め切るべし、少しにて、たてつけを明け置くべからば、且、閉の際ハ、音のせぬやう心懸け、手をあけたる處を、少し持ち揚げる心得にて、明けたてをべし

幕出入の事

幕の出入りにも、跪きをなぐり、右の手をつき、左の

手にて幕を持上げ、身を内へまりこみて、左右を能く認め、氣づかひして、左へ廻らんとする時ハ、持をうきまはりて、裾をかほし、右へ廻らんとする時ハ、後部へ投げ棄て、右の手にて裾をかほし、後へ出る時ハ、兩手にて、三折外面へ折かへし、後へ投げ越し、裾を直して、立去るべし

幕串の立やうの事

先づ右の方を、一本立て、次ぎハ左の方に、一本立て、其次、中に立つ、如此して、順次を追ふべし

幕の打様の事

晝あれば、幕串を内にし、夜あれば、外あして打べし、又戸口に打おひ、絞あき所を、打合にやう打べし、手繩の端ハ、左り女結び、右男結び、お結び留むる、凡て幕ハ、左より打初むるを式とし

### 幕明け様の事

紙を引きさた、互に結び合せ、先づ右を明け、次に左を明け、最後に中部を明け、ひく時に、結ぶものあり

### 貴人へ對して談話をする時心得の事

貴人へ對し、もの申に事ある時ハ、其座の左の方

へ、身をとせて、座を占め、もどめ詞を出さ時、顔面を見次第に、已ぶ頭を下け、襟或ハ袖の邊を見る時、其主意を言ひ盡し、膝の邊を見るとき、全く詞ハを、言ひ収むる如くさべし、同輩と談話するときハ、口氣の人、に觸さざるやう、心懸け、聲高からば低う、口早からず重う、如何にも爽あ



あつて、其意味の能く先方へ、底徹せんとを務むべし、且貴人杯へ對して、野鄙ある詞遣ひをなすハ、實に耻づべき事あり、又慎みをき人ハ、往々人の嘯の、未だ言ひ終らざるに、早く已れより、詞を發する事あり、禮に閑いざるの甚也、若し又自分一個の説を、吐き出さんとする時ハ、或人の説ハ、斯く々々ありと、他人の説の如くに云出さハ、謙遜にて、至極穩かふは習ひにぞある

馬上にて貴人に申承る事

先づ手綱の輪を直して、前輪に納め、貴人の在る

方の鐙を踏み外し、其正面ある時ハ、兩方の鐙を踏み外し、若し止むを得ざる時ハ、たをひをバツして、もの申し又ハ承るべし

貴人の前にて扇を遣ふ事

扇子を三間斗り開き、左の手をつき、鼻のあたりを、ものづらに扇くべし、されども、少年杯ハ、別してのこと、可成ハ遣はぬやうにさべし、故に給仕ふときふ時ハ、扇を持たぬを良と見たとへ持つとも、帯にさして、忘るるとも、遣はぬやう、前以て用意し置くべし

貴人の前にて鼻をかむ事

鼻をかむにハ、最初務めて、聲低くかみ、次きに少  
しく高くかみ、最後にハ、又初と同トく低く短く  
かむ、如く、三切にかむを習ひとまべし、斯く云ふ  
も、汚らしき聲を人の耳に入らば、ハ、不作法とせ  
るより、起りしと故、貴人へ對せる時、鼻をかむに  
ハ、次の間迄立ちのきて、かむべし、若し止むを得  
ざる時ハ下座へ向ひてかむべきあり

貴人へ面會する時の事

次きの間にて、左の手をつき、右の手を膝の上に

をき、右ある膝を後ろに引く如くして袴の裾の  
ひろがらざるやう、右の手にて撫でよせ、左の膝  
を引き合せて、両手をつくと等しく言を發して  
頭を垂る可し

貴人馬に召さばく時の事

脇より卒と手を懸け頓て手綱を打懸け既に乗  
り静められし時を窺ひ、徐かに手放つあり、同  
等の人の乗る時も、亦右の如くまべし

鐙押様の事

左の手に花形を取り、右の手にまぼりを取り、左

の膝を据へて抱へ、騎り給へる時、後の袴の邊を直とべし、総て口をとり、鐙を押ふる杯のときハ、僻ある馬と心得て、氣づひとべし

鞭渡やうの事

とつかを請取人の右の方へあるやう、人の方へ向け腕かけての下りたるを左の手に取り添へて渡さあり、又とつゝへかけて渡さもよし

貴人へ扇小刀を差出の事

小刀ハ、右に鞆の端を持ち、左の手を添へ、又を我方へ向け立て、捧ぐべし、斯くして差出を時ハ、

貴人の方にて、我持ちたる手より上の方を把らるゝ様心を注ぐべし、又我小刀ハ、或ハ夜中かど、差出に事ある時ハ、右の手をもて、小刀の先にて背に當る方を持ち、左の手に据へ、鞆を彼方へ向けて、差出をべし、菓物などを取扱ハるゝとき、差出にハ、鼻紙又ハ、手拭にて、鞆を持ち捧ぐべし、扇子を差出を時にも、右ふ要の所を持ち、左の手へ立て掛けて、捧ぐべし、自然我が所持せらるゝ扇子を望まらるゝ時ハ、地紙の處を、兩手に持ち、要の處をとらるゝやうに、差出をべし

出家へ扇を参らる事

扇を左に持ち、一禮して右へ取直し、渡さべし  
楊枝を差上る時の事

扇を少し斜に、楊枝の尖を貴人の左へ向け、其上に据へて、差出さべし。凡て、扇に物を据へ、差出るときは、右に要の處を持ち、左に其先きを持ち、少し斜めにして、切目の先方へ、向かぬ様、心懸け、差出さべし。但其載る所の品物に應じ、或は五間七間も開き、裏面も載せて、出さるのと心得べし  
珠數香箱を参らる事

珠數ハ扇に据へ、右の脇に座して、捧くあり、香箱ハ、左の脇より、進むるあり

香盆に香炉香箸を置く事

香炉ハ、盆の中、香合ハ左、香箸ハ右と、三つかたハの心得にて置あり、焼香の時ハ、何れも一所に置べし、灰燼を入る器あり時ハ、香合を右、香箸を中、灰燼入きを向ふへ置くあり

鼻紙を参らる事

左の袖の下に持ち、先方の袖の下へ、差出さべし

貴人へ硯料紙を参る事

料紙を硯箱の下に重ね、乳の通に捧けて持出で、硯を置きつゝ、紙と硯を引き別けて、自分の左の方へ置き、蓋を取りて、右の方に据へ、水を入れ、墨を能く磨り、筆を志めて、箱を向ふへ廻し、前に押やり、紙も蓋の上に載せて、其儘貴人の左の膝の前へ、押し出して立ち去るべし、其箱を仕廻しに、進出で、硯箱より、少し手前に座し、両手をつきて、右の膝より、寄り寄り、先づ蓋を引き寄せ、次ぎに、硯を右へ廻して、我方へ引き寄せ、筆の尖を

直くし、鞘を着せ、墨をハ海へ流し込み、蓋を掩ふて、紙を箱の上に載せ置くあり、若し其儘持去るゑ時、再び紙を箱の下に重ね直して、立ち去るあり、其立去はときハ、座しあがり、膝にて、少し後へをり下りて、立ちのあり

火鉢を出す事

足を二本、貴人の方へ向けて、出はあり

煙草盆出しやうの事

火入れを、先方の、右ふあるやうにし、少し押し、人の前に出はべし



御茶参らまは事

古禮、天目けんぎんをば、臺に据へて出まかり、呑む人ハ、臺をさぐり取りて、飲むべし、通ひの者之を知らざるときハ、臺を放さぬ者あれば、又強て取るにも及ばず、且當時の人ハ、皆を臺より取下りて飲むなれども、全体臺にまへねば、ちつきとて、昔より、臺を捧へたるものなれば、取下りて飲むハ、ときおとにあらざるあり、乍去茶おどのぬるみたるときハ、一口二口呑みて、臺より取下り、呑むもよし

座頭の案内さる事

右の袖を叩へて、静かに歩み進み、座に着ける後ハ、詞柔らかに、其座に在まらん人々の尊卑長幼の次第を告げ、語るべし、若し茶或ハ盃杯渡さることあるときハ、自分の右の手に持ちて、座頭の左の傍に座し、何品を参らまるとして、一々に告げ、其手を取り、其器物に、徐



かたきハらゝむべし

書狀奉る事

左の手にて、文箱を持ち、右の掌の上に据へて、奉るべし。又文箱に封ふき時ハ、取出して、書狀のみ、差出して、良し、其書狀若し下輩の者の書狀あり、せば、其名の所を持ちて、差出さべし。又書狀を、火に入れよと命せらるる時ハ、其場にて引裂き、持出で、火に入るべし。斯くの如きハ、貴人も親ら入らるべきに、會ま其場所に、火をき時に限りて、命せらるるものあるべけれバ、引裂き持出る

あり、見らるる處にて、火に入るし、みハ、別段引裂くに及ばぬ

貴人と碁將碁を弄ぶ時の事

盤の上に、碁器を並らべ、所望せらるるに任せて、自分ハ、其殘さる碁器を取るべし。又自分より碁器を差出さる時ハ、白きを進まべし。將碁の時ハ、馬を入れたる箱を、盤上に明け、先方の馬を立てらるしを見て、自分にも馬を立てべし。我より先きに馬を取扱ハ、無禮あり、又双六杯も、皆同様のことあり

寐所をとる事

其次の望み従ふべし、乍去東床あれば南の方を  
枕とし、西床あれば北の方を枕とまゐるを、通禮と  
し水式ハ、皆玄北枕と定む

隠所へ供まゐる時の事

左に手燭を持ち、先に進み、近邊を見合せ、其後貴  
人を入れ、自分には、程宜しき邊に立去りて、侍つ  
べし、乍去、余り遠きふ過ぐれば、御供の甲斐なく、  
近きハ亦無禮あり、能く心得居るべし

手水をかけ参まゐる事

手拭をば扇ふ、据へ持参まゐ  
し水を漑くには、間斷なく注  
きかくべし

遊山見物の時短冊送り  
様の事

紅葉の枝あどに短冊を付け  
て送るに、高貴の人方へハ、一  
の枝に付け、同等あれば中の  
枝に付け、下等の人へハ、木末  
に付けて送るべし、其短冊を



結ぶにハ、人に送る時、順に結ひ返すの時ハ、逆に結ぶべし、結びたる後、其短冊の面を表へ向け、置くべし、水引めて、結び付る杯ハ、禮にあま事あり、又縁を求むる心よりして、月雪奈とを咏したる歌を送る時ハ、松ふどに付りて送る可し

連歌の座敷にて心得の事

連歌の座敷に在る時ハ、手前の疊三帖より外の處へ、眼を注ぐべからむ、又二句付く間ハ、用事ありとも、其座を立たざるを禮とす

懐紙を貴人の御覽お供ふる時の事

座敷にかけたる、懐紙ふど、御目に懸る時ハ、静かに取りて、折紙の如くにた、み、字頭を我が方へ向け、差出さる、扇に載せて出はし時、同様あり、又短冊を出さる時、前に全ド

花の請取渡しの事

木の時ハ、花を上にして渡し、草花ハ、花を下にして渡さべし、莖強けま、花を横たへて渡さるよし、又花のくきを、紙に包み、水引をかけて、差出さる事もあるあり

掛け物の請取渡しの事

廣ぶたみ載せ、兩方の手をもて蓋の左右を擡げ、其儘に渡さすのあり、下に置くことあるべうに掛物の並べやうハ、三幅對の時ハ、先きの方へ客位の幅を置き、次に中尊手前に主位と、斯くの如くに並ぶべし、其置きやうハ、三幅共に同どくして、巻きたる儘の目を、請取る人の方へ向け、請取れる人ハ、直く開く事の出来る心得にて、置くべきあり、一幅の時も、矢張同様と知るべし。

座敷に繪を掛る事

卷緒を解き、風袋を直し、卷緒を脇へ引き、筭竹に

懸けて、右に竿を持ち、左に掛物を持ち、釘に懸けて、右に竿を持ち、右に掛物を、軸の左右にあて、解き下りべし、此くする時ハ、假令床廣くとを、決して、其床を踏むべうに、若し止むことあれば、兩膝をば、床の上につくべし、解き下げたる后ハ、其たりひびきを直し、三尺斗り後に、だり、手をつきて、偏否を見るべし、卷納むる時ハ、兩手にて、下より三分一、卷揚げ、卷緒を筭竹に懸けて、卒と下り、卷くあり、三幅の時ハ、主位を懸け、次に客位を懸、最後に中を懸るあり、卷く時ハ、客位を巻き、



次きに中を巻き、最後に主位を巻あり、又巻緒の引方ハ、一幅の時ハ上座の方へ引くま、り、三幅對ハ、中尊客位ハ上座の方へ引き、主位斗りハ下座の方へ引くま

掛物生花見やうの事

先づ間を一間斗り置きて見るべし、近く寄れとの挨拶ある時ハ、床の前の横疊一帖あ

けて居り、扇をぬきて脇へ置き、両手又ハ、片手をつきて見るべし、三幅對ある時ハ、初めに中を見次きに、客位主位と見納むべし、生花の見やうも、同様あり、立花生花ある床ハ、先花を見て、后掛物を見るべし、若し手燭を持って見る時ハ、臺を持ち、柄をバ前にきし、出して見るべし、大概座敷に出でたる時ハ、一旦着座すると、其儘に先づ掛物生花等、總ての飾物に、氣を付けて一見せし、其飾りものをバ、後ろみして座を事あるべからば

神佛の前に立花置様の事

神前に向ひてハ、巳の右の方に置くべく、佛前に置く時ハ、巳の左の方に置くなり

立馬見やりの事

右を見て後へ廻り左へ通つて見るべく、此の如く通つて後ハ、又後へ通るも苦くからば

庭入口の事

軒の脇に在るハ、貴人の入口にして、軒の向ひふ有るハ、平人の入口なり、出入る人の、無言あるべく、入口ハ、足の見ゆる志と肝要なり

庭を掃く事

軒の方より、向ひへ掃くべく、掃き終りて、椽に上る時ハ、たゞ紙にて足を拭ひ、然る后椽に上るべく

屏風立やりの事

真中を二つ折りて、左右へ開くなり、墨繪ハ上座、彩色畫ハ下座、墨跡ハ上、繪ハ下、山ハ上、水ハ下、古筆ハ上、新筆ハ下と夫々分別あるべく、但一双あれば、書出しを上座、終りを下座に開くべく

燭臺置やりの事

其座に賞翫する人の方へ持出でて置くべし、乍  
去余りに膝元へ置くべし、さうだがんくわの臺か  
らば、燭剪掛をば我方へ向けて置くべし

蠟燭の尖を取る事

蠟臺の二三挺も出て在る時ハ、取下して剪るべ  
し、一挺の時ハ、其儘にて剪るべし、深く剪る時ハ、  
燈の消る憂あり、故に燃へ口を凡五分斗り残り  
て剪るべし、とりかゆる時ハ、勝手の方より、手  
燭を持ち來り、火をともして立てかゆべし、かへ  
きしをつぐハ、誠に無作法なり

小袖渡しやうの事

小袖を二つお折て、左の衿を上へまゝ、衿の先を  
請取人の右へ、ちと筋うへて出さべし、請取人ハ、  
取直して持あり、手にも据へ、廣蓋ふも入れて、出  
し事あり、手に据る時ハ、左の手に据へ、右にて上  
を抱へ、渡るとき、兩の手に据へて渡さべし

初物を贈る時の事

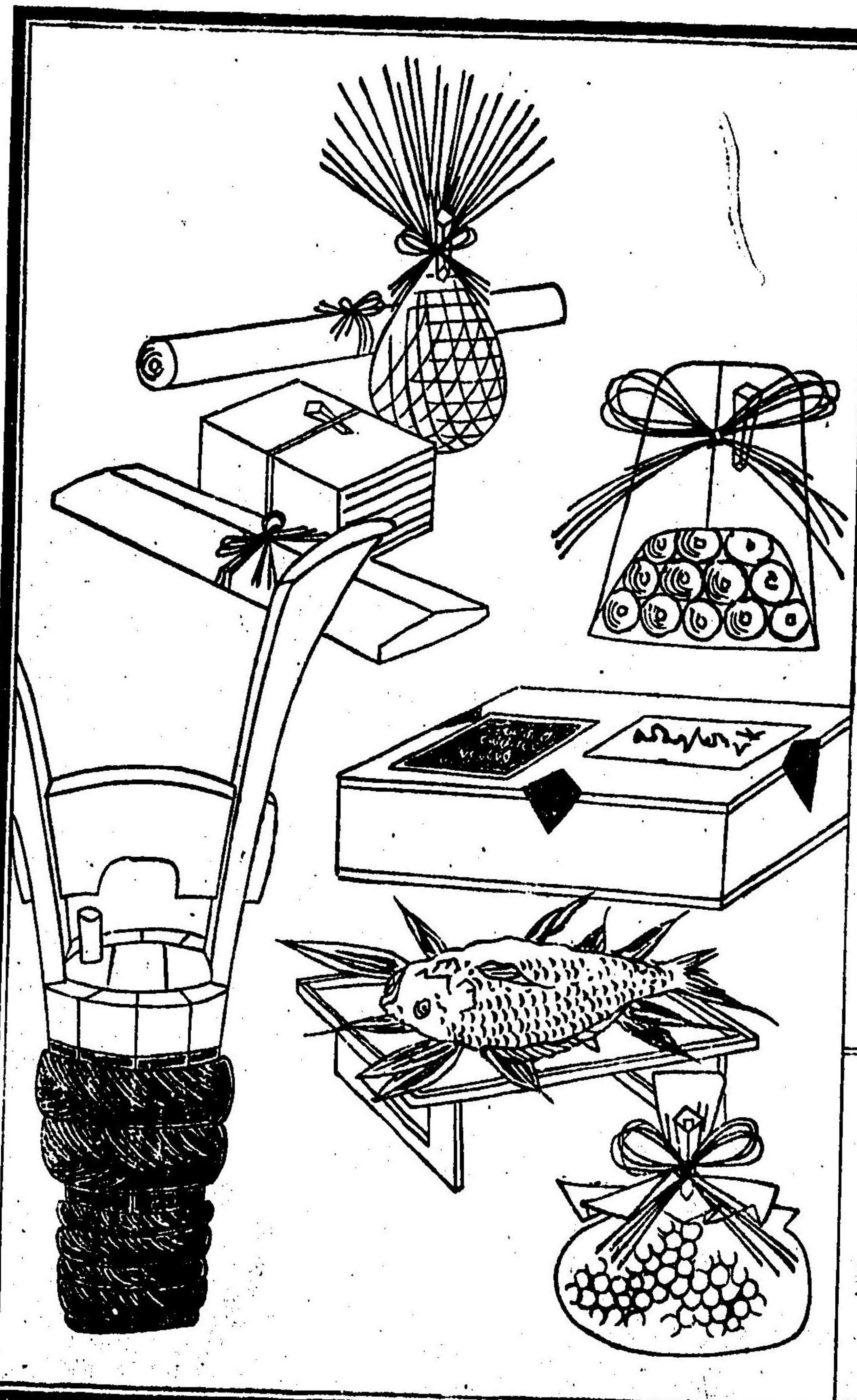
何程數多くあるとも、初物として贈る數ハ、少か  
まゝ、若し左まき時ハ、初物の印を、能  
心得べし



小袖帷積やうの事

横に臺を据へて、我左の方より積み出さべし。小袖の襟をバ右の手に持ち、左の手にて兩方の袖を持ち、下ぶへの上にて成るやう、真中より二つに折、襟を先へして積み、兩の袖を重ねゑがら、上へ折るへに、二つめとりへ、上に成たる方の袖を一つ斗り折かへし、初の小袖に次の袖のかわるやうに積むあり、幾領の小袖をつむとも、右に全し事あり

臺に魚載せやうの事



魚一つの時ハ、臺を横にして、頭を我左りへあし、  
海の魚ハ腹を向ふへ、川魚ハ背を向ふへむけて  
載るべし人の前に出るときハ、其頭をバ請取る人  
の左の方へ置くあり

數りふ時臺に積む事

魚を積むにも、我左の方より、積み出ればし海川  
の魚に抱いらば、背を我左りに頭を先きに、腹を  
右にして、並へ尚其次きハ、魚の体を半バ上の魚  
にあげて、初めふ積みたる魚と、腹を合せ、背を我  
右にして並ぶべし、又其次に並ぶるハ、最初並べ

たる時の如くし、並べて幾重に至るしも、皆全  
く人の前に出るときハ、尾を請取る人の前に向  
くまべし

臺に鳥載せやりの事

鳥一つある時ハ、臺を横にして、我左の方を頭と  
し、鳥をおふむけて載せ、其頭をバ左の羽かへの  
内へ曲けて、羽を少く廣くべし人の前に出るとき  
ハ、魚に全し

數りる時臺に積む事

春夏ハ雄鳥より初め、秋冬ハ雌鳥より初めて、我

左より積み出し、体をあふむけ、頭を先にして、左の羽かひにをり込み、其次きは、頭を右ふをり曲け並ぶべし、二通りに積み、又人の前に出れば、うい、魚に全し、鶉雲雀は、頭を曲げざして、臺に積みべし。

折のものを人の前に出るとき心得の事

折の物など、総して足ある臺の如きを人の前に出るときは、兩の足を前へ向けて差出まべし。

亭主心得の事

客を請せんと欲する時は、庭まはりまでも、塵を

きやう、掃除に氣を付くるおと第一あり、又自分相應に、飾りつけをもよほべし、尋常の人にては、掛物立花などの、飾付をよほ如きは、古へよりの饗禮よれば、成るべく、此等の事に氣を配るべし、立花は、四季に應じ、春花夏瓜秋果冬火の別あり、又貴人を請ひたる時は、中門或は戸口迄出迎へ、立ちあがり、禮して、其後ろに従ひ、貴人椽に上り給へるときは、椽の上りて、勝手の方へ往くべし、且客を饗するにも、種々定まりたる式あり、

とも、通例客の座に着きたるときは、先づ茶を出し、客の既に揃ひなば、料理を出さべし。料理を出すに、あまり遅きは誠にあらず。又今揃ふたまは、とて、さぐりに持出れども、待ち兼ねたるやうの体に見へて、無禮なり。此場合ハ、能々見合せあるべき事をぞがし。

### 手長の事

手長とハ、勝手の方より膳を請取りて、通ひの方へ渡さる人の稱へあり。又其通ひとハ、膳を手長より請取りて、座敷へ出さる人の稱と知るべし。膳



ハ左の手にて、中程より少し前に當る邊を持ち、大指を膳の椽へかけ、他の四指を右下へ廻りて、かかと持ち、右の手ハ、膳の右の椽へ軽くかけ、乳の通りに上げ、差出して持て、低く持ちて、我が息の膳にかゝる様の事あるべし。だがる故に、其容体ハ、腰をさへ、少し前へかゝり、臂をばさ

のみいら、げん、顔持へ、膳の下より三尺ほど先  
を見る様心得置べし、且給仕する時ハたより紙  
杖持つべきあり

膳のまへやうの事

膳を持ちて、客の前に出てたるときハ、左の膝を  
つき、右の膝をつきさま、膳を下に置き、膳の向ふ  
を、少く客人の左の方へよせてまへ手を放たむ、  
其儘に、自分の体を後ろへ引きて後ち、其膳を四  
五分斗り押込み立つべし、客人の膝へ、膳のつき  
たるも、悪く遠きもよろしからざるあり、又一

座中等しき貴人兩た方ある時ハ、通ひの者二人  
にて、一度に膳を居へどききあり

膳を撒き時の事

先づ本膳、二の膳、三の膳と、次第あるべし、坐の開  
きやうハ、左右何れとも、出口の近き方へ開き、貴  
人を後ろにせぬやう、立歸るあり、通ひの者、二三  
人も一同お座敷へ出でたる時ハ、少くづつ、間を  
置きて、互ひ違ひに、引き出れやう心懸べし

通ひの三手作りの事

先づ通ひの内にて、誰々ハ向ひ座、誰々ハ右座、或

ハ左座と、受持を定め、其受持斗り大事に勤むべし。おくまる時ハ、引違ひ取違ひ、間ぬけ等ぶつ、かのつることあり。

### 通ひの者行違ふ時心得の事

通ひの行き違ふ時ハ、手明きの方より片傍へより、手をつきてつくバ、物持ちたる方を通りて、立ち行くべし。場せまき座敷杯にてハ、殊更心得べき事あり。

### 飯のつきやうの事

左の手を仰向けて出さ時、客人より飯碗をいた

されまば、其いとどきを志ると取り、右の手にて杓子を持ち、飯の真中を、左右へ少しかきわけ、二まぐひつぎて、其儘にさし出さべし。飯器の蓋ハ、夏おれば足おの傍へ置き、持出さべし。冬ハ其儘に持出で、蓋を取るものあり。

### 汁のかへやうの事

汁をかへるハ、盆をもちおてかへるあり。かへたる汁ハ、勝手にて蓋をおして、持ち出でたる后、右の手にて蓋を取り、盆の傍へ置き、両手にて差出さべし。提に冷汁を入きて、持出むる時ハ、右の

手に提をもち、左に箸をもちて、客の前迄進み出  
ぐべし、つぐ時ハ、右の大指に、箸を持ちそへてつ  
ぐあり、又左に持かへてつぐ事も、とり、時宜を見  
合はば、

### 食籠出き事

小角に箸をさし、食籠の上に置きて、持出て下に  
置きて、小角を取り、箸をぬき、右の手に持ちて、食  
籠の蓋を取り、箸を中へ入れ、小角を持て立べし  
酌人心得の事  
先盃を持出で、其座の貴人の方へよせてまへを

き、然る后ち、鉋子を持參して  
盃の側に跪つき、左の手に盃  
臺を持ち、右の手に鉋子を持  
ちて、三足斗り後ろへたり  
又跪きて待つべし、客人挨拶  
とりて、盃をはどむべき人定  
まりたる時ハ、其人の側へ持  
參して、差出にべきあり、総  
て取持する間ハ、序破急の三  
事を考へ、急の座に永々敷談



又ハ序の座に、亂酒の体あどあるべし、心  
得べき事あり

酌取やうの事

左の膝をつき、右の膝を少くたたく、つぎまがら  
右の膝をもともにつくべし、但銚子ハ右の手に  
をりめの所を持ち、大なる銚子ハ、つまかくし、所  
へつめて持ち、左の手にて、折目の上を持ちてつ  
ぐべし、間鍋ハ右の手をつるの上よりかけ、小指  
と、四三の指にて、志かと持ち、拇指と食指とを緩  
くし、左の手の拇指を、蓋の上にかは、残りの指を、

そこふかけてつぐべし、又小さな盃臺ハ、左の手  
にて取扱ふべし、大ひあるハ、銚子を下に置き、兩  
手に持ちて、取扱ふべきなり、客人肴をハさみ給  
ふ時ハ、左へ開きて座をべきなり

盃の元を隔つ事

盃をさしたる人と、呑む人との間に、酌人の居る  
ふとあるべからず、必し右か左へそふて、居る心  
得をべし、之を元を隔つと云ふあり

肴の事

取肴持ち出てたる時ハ、主人又ハ酌取れる人の



傍にをくべし、此れ通ふ人の心得べき事なり。時  
宜にたり、肴をいさみて客に参らざる時ハ、箸先  
を上げて参らまべし、同輩ハ、横一文字に、下輩  
ハ、箸先の下るやうはさみて、参らざるなり。又  
貴人へ参まる時ハ、必だ肴の臺を前へ持参るべ  
し、客とありて其座に在る人も、肴をばさみて参  
らざることあり、皆此の例に従ふべし。

吸物肴を出さし時機の事

先づ吸物を出して、次ぎに盃を出さべし、肴ハ、一  
人吞むと直に出れば、不意に來りたる客あど

あひしるふ時未だ吸物も出來合ハ、きんに、客の  
歸る体あるときハ、盃を出し置きてし、左もあ  
くバ、盃斗り出れば、からび又取肴數多く出てあ  
る時ハ、前に出でたる肴ハ、引き入道てし。

せこを入る事

酒宴の時、上座ハ、賑しく、盃も廻まども、下座ハ、至  
て淋敷まづまりたる事の、ある時、上座の人より  
せこを入れしと命せらるし、あとおるべし、さる  
時ハ、酌取る人、自分に先づ酒を飲み、上座に、ある  
肴を持ちて、盃を掌の上に居へ、下座へ酒を勧む

客心得の事

人とり請せらばて饗應に遇ふ時ハ、何事も慎み  
を第一とあし、挨拶等より著坐の時宜まて能々  
氣を付け、相伴の人、及其家の人々杯へも、無禮な  
きやう、心懸くべきふと肝要あり、且亭主の、殊更  
馳走して仕組みたる料理などハ、それれく挨拶し  
て、むぎと食まる事の、なきやう、氣を付くべし、又  
往々人の請せる刻限を、後るゝ人の、世にあるも  
の、あり、此等ハ云迄も、かく誠に、惡しき僻なれば、

早からば遅からば、恰當の時刻至らハ、用事を打  
棄るとも立出で、其乞に應むべし

人前に或る時心得の事

人前に交る時ハ、慇懃にして、粗忽の事あるべし  
らば、着坐の時ハ、先づ、我居るべき處より下座に  
て一禮し、挨拶を述べて、徐かに、自分の居るべき  
坐へ直ること肝要あり、人より尊まるゝ、逆身の  
程をも考へ、高座さるゝ、實に賤むべき事あり、  
きり、逆座をべき處へ請せらるゝを、強て自退を  
るも亦無禮にて、料理席などハ、其塩梅加減を損



むろことあれば、一應ハ自退  
 けりとも人の勸に任せて座  
 に着くべきあり

膳に居り様の事

真向きに居らば、少くもみろ  
 けて居るやう心得、左の足を  
 袴の裾に踏みくるみて前へ  
 出、右の足の常の如く後ろ  
 へ座をべし、且膳をさへる人  
 ハ、大概亭主ハ又ハ亭主の子

息親屬ハ、時宜ふよりてハ、貴人も親らをへらる  
 る事あるべし、貴人の親らをへらるる時ハ、膳を  
 下に置るるを待たば、此方より両手ハ出、頭  
 を下けて、敬しく請取り、下に置き、さま、両手をつ  
 きて、禮を述べ、又亭主の方の召使ひにて、も  
 並人にあらざるるときハ、膳をさへたるとき、両手  
 をつきて、挨拶をべし、常の通ひなれば、其儀に及  
 ばざるあり

喰やうの事

先箸を取り直し、飯を二箸喰ひて、左の手に本汁

を取上げ、汁を啜らば、實を三箸ハさみあげて喰ひ、汁を右へ移して膳に置き、又飯を取上げ、三箸喰ひて、前の如く汁を取上げ、實を喰む。汁を啜り、前の如く取りて下に置き、次きハ本膳の左の角にある菜を喰ふべし、其後ハ、如何様に喰ふとも苦く、又常の飯を喰ふ時ハ、先づ飯を取上げ、少づ、二箸三箸をくひて喰ひ、次に汁をまひて宜きかり、飯を二度斗り喰ひ、其後菜を喰初むべし、此時ハ、精進又ハ、あへもの、類より喰ふべし、但口に飯をふくみあぐ、數多

の菜數一度に取込み食ふ事ハ、重菜逆誠に惡し、何品にても一品づ、喰ふべし、汁かける時ハ、飯の少あくなりたる時を考へ、はやくかけて、喰ひ納むべきかり、其後ハ、再進あるとも受くべし、又其座中の貴人ハ、或ハ年長けたる上座の人より先に汁かける事あるべからざる也、箸の持方ハ、主人の身分に依り、高貴あるほど、段々に短く持つべし、飯中に盃めぐりあは、箸を飯椀と汁椀の間に筋違へて置き、膳の椀にかけ置くべし、食終りたる時ハ、初めの如く横に置く可し

かへ箸の事

膳の居へかへある時ハ、別に箸ハ付らぬものあり、故に、以前よりすはりたる箸を取り置くべし、但し貴人あどへハ、幾度もけしをそへて出さるべきハ、古通りの禮あり

湯漬の事

此時ハ、洗ひ飯にして出さ故箸にてゆし中を崩し、湯を七分どふり請けて箸をとり食ふべし、菜ハ香の物より外食ふべし、汁ハ吸ハばして實斗り食ふべし、跡の湯ハ、箸をそへず、湯斗り受

けて吞むべし、此時ハ、香のものをも食ふべからむ、常の飯の湯とハ、自ら異おれり

汁かへたる時の事

本汁をかへたる時ハ、二の汁を啜るべし、二の汁をかき時ハ、汁の來る迄飯を食ハぬを本式と見、乍去、箸を構へて待つも見苦しきもの故、煮物の汁ある者も又ハ、菜の目立ぬものをそへて、飯を食ふべし

冷汁の請やうの事

引冷汁の時ハ、かさに受くべし、汁かくる時ハ、冷

汁へ飯を付けて喰ふべし

盃獻酬の事

盃を人に獻するにハ、飲ほし  
て口とを振り流し、左の掌に  
居へ、右の手にて、右まハハハ  
少一回、卒といたゞき、臺に  
まへてさすべし、臺より下り  
置くおとあるべからば  
盃を受くる時ハ、右の手に盃、  
左の手に臺を持ち、中にて左



右へ引分け、臺を左の方に置き、左の掌に盃をま  
へて、右の手を盃の椽へ卒と添へ、いたゞくべし  
看引やうの事

貴人より引物ある時ハ、手背を下へあり、左の掌  
の上に重ねて、臂を下に敬ふ心得にて出さべし、  
同輩杯、少々高下あるの時ハ、掌を上へあり、左の  
手を添へて出し、又ハ、其手を腕にそへて、出さべ  
し、下輩ある時ハ、左の手を遠くそへ、或ハ、左の手  
を添ふるも、手背を上へあり、又片手にて出さべ  
し、汁のたるものある時ハ、器物の蓋にて受くべ

一、貴人ある時ハ蓋を渡さべからば我手に持ち  
まがぐら、受けていたゞくべし

菜の喰ひやうの事

膳の上にある菜ハ取上げて食ふべからば又膳  
の右に在る菜ハ右の手にて取り左の手に移し  
て食ひ左の方に在る菜ハ左にて取り食ふべし  
右の手にて左の方の菜を取り左にて右の菜を  
取り食ふ事あるべからば汁のたる菜ある時ハ  
汁椀の上のおたりにて食ふべし假令無調法な  
る事あるとも疊を穢さぬ爲めなり能々用心を

べし尾首ある焼ものハ表ばかり喰ひて裏を喰  
ふべからば時に依り菜の引落おどあるときハ  
乞求むる様の事あるべし若し一座にある  
を傍より氣付きたる事あるときハ必通ひの人  
へそと氣を付くべき也

串さしたる物喰やうの事

串を左の手に持ち箸にてはさみぬき食ふべし

焼鳥喰やうの事

箸を取り上げて直ぐに持ち器ものを取り上げ  
て箸持ちまがぐら手にて喰ふべし又箸を取らば

して喰ふもよし

### 粥喰やうの事

箸を取上げ、汁を一口吸ひて、粥を取上げ喰ふべし、其他湯漬けも同ト

### 吸物喰べ様の事

初獻に出でたるは、先づ汁を吸ひ、後に實を喰ひ、二獻の時ハ、先實を喰ひて、後汁を吸ひ、三獻ハ、初獻と同トかるべし

### はうはん喰ひやうの事

飯の上におやくを置きて、出るものおれは汁を

かけ、静かに片端より崩し食ふべし

### 赤飯喰やうの事

先づ箸を取り、右の手に真直に持たせ、指三つにて食ふべし

### 糲喰やうの事

水を見合せて、幾度となく請け、箸にてかき立て、喰ふべし、喰ひて後ハ、塩を食ふべし、菜ハ、梅干、密漬、生姜等あり、又塩と昆布の事もあるべし

### まんぢゆうの喰やうの事

こしきの方を上にし、先半分斗りわりかけ、又押



合せ二三度斯くの如くして、お人の落ざるやう  
心懸け、わり切つたる時ハ、右の方を下におき、左  
の方を喰ひいまひ、又残りの半分を食ふべし、総  
へて斯く菓子類を食ふときハ、口に手をかざし  
て食ひ脇へ向きたふ紙を取出し口を拭ふべ  
し、楊枝を持ちて、喰へたる時ハ、口を拭ひ終りた  
る時共に懐に入るべきなり

### 折の事

折にハ何品ふても、一色づゝ盛るべし、十合せあ  
らバ、十種の物を盛るべき事と心得べし、箸ハ常

に折の臺に据へ置くべし、又折取揃へ他所へ送  
るときハ、おとりにて去ばり、十文字にかけて送  
るべし、時宜に依りてハ其儘に又座敷へ出だる  
事もあまば、可成手ぎハよく去ばりをくべき事  
あり

### 箸の病の事

繪をや喰はん、にーめをや喰んと定まりたる思  
ひなくして、ひまどる僻を箸あまりと云ひ、焼物  
を喰ふて、又直ふ煮物を喰ふを、移り箸と云ひ、箸  
につきたる飯粒をかたへのも、ばりふて落は



をにぎり箸と云ひ、口にて取るを、もぎくひと云ひ、深くねふたねぶり箸と云ひ、口の中へ押込むを、ごどばりと云ひ、椀皿等にもりたる菜の、に在るを、おど起して食ふを、ごど箸と云ひ、まじり何ぞあるかと、探りみるを、さぐり箸と云ひ、香の物にて、茶の湯をかき廻るを、まはり箸と云ひ、く

はんとして、箸をつけ、がく、はぐりて引くを、ぞら箸と云ひ、汁の再進を、通の者より受取りて、膳にも置かむ、直に吸ふを、うけ吸ひと云ひ、飯を椀の中にて、を、かへ、かためて、喰ふを、またもりと云ひ、膳の向ひに在る菜を取上げもせで、喰ふを、膳ごりと云ひ、うつむきて、挨拶もせで、物喰ふふりを、犬喰ひと云ふ、此等の僻ハ、尤も慎むべきの事なれば、今爰に記して、筆をさめと、まべ、皆の人能よく、心を懸け給ひ、此僻を納めて、出さぬやうせられん、と、誠に願ふ所なれ

新撰小學諸禮式終

定價金二拾五錢

藏

明治十五年七月十二日御届

編輯人

大阪府平民

在田嘉九郎

西區京町堀通五丁目  
二番地

出版人

同

山口恒七

東區北久太郎町四丁目  
五十三番地

同

同

北村幸次郎

東區安土町四丁目  
四番地

同

同

梶田喜藏

東區北久寶寺町四丁目  
十四番地

